「仕返しはダメ」（マタイによる福音書五章三八～四二節）

1　目には目、歯には歯

今日も、山上の説教のイエスの教えを、一つ取り上げます。聖書の見出しに「復讐してはならない」とあります。今日の箇所のテーマは復讐とか、報復とか、人から道理にはずれた要求を受けたときなど、どのように応じるべきかという問題です。

最初に、山上の説教に共通した言い方がここにも出てきますので、そこから見て行くことにします。

「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない」（三八～三九節）。

共通した言い方というのは、この中の、「あなたがたも聞いているとおり・・・と命じられている。しかし、わたしは言っておく」、これです。この五章だけで、六回出て来ます。「あなたがたも聞いているとおり」という決まった言葉で引用されるのは旧約聖書の教えです。〈十戒〉だけでなく、一般に〈律法〉と呼ばれる、出エジプト記、申命記など、旧約の最初の部分に書いてあるさまざまな掟（おきて）から引いてあります。どれも、ユダヤ人にとっては、子どもの頃から教えられてきた、いわば常識としてよく知っていた教えです。

こうして引用しながら、イエスは、その都度、これに対し、「しかし、わたしは言っておく」と言っています。このイエスの言葉、注意していただきたいのは、旧約の教えを間違っていると言っているのではないことです。

そうではありません。旧約は神の言葉です。唯一の神の言葉です。間違ってもいないし、いまは通用しないというのでもありません。いまもそれに聞き従い、守らなければならない。成就（「完成」五・一七）されなければならないのです。そしてイエスは「わたしは言っておく」という言葉で、どのようにすることが、それを守ることなのか、旧約で示された神の言葉に従うことなのか、御心に沿うことなのかを示しているのです。

例えば、先週取り上げたところ、思い出していただければと思います。「殺してはならない」という掟が上げられていました。この戒めに、私どもいぜんとして従わなければならないのです。神の言葉ですから、そうなのです。しかしイエスは、それに従う、それを守る、ということは、兄弟に〈腹を立てない〉ことによってはじめて達成されることになると教えていました。

さて、今日の箇所です。はじめにイエスは、昔からあなたがたは「目には目を、歯には歯を」と聞いてきた、そうした原則の中で生きてきた、実際それこそ、旧約に示された教えであると言っています（出エジプト二一・二四、レビ二四・二〇、申命記一九・二一九他）。

この掟の主旨は、目に対しては目、歯に対しては歯、ですから、被害を受けた場合に、受けた被害と同等以上の報復をしてはならないという意味です。目をやられたからといって、それを理由に、目だけでなく、相手の顔全部を傷つけるようなことをしてはならないということです。

この掟は、ですから、正当な報復を、報復の範囲は限られているとはいえ、認めているのです。これを引用したイエスも、認めているのです。ここは誤解しないようにしなければならないところです。報復がなぜ認められているかといえば、それによって悪が悪としてはっきりさせられ、その上で克服され、不正が取り除かれるためです。イスラエルに悪や不正をはびこらせてはなりません。そのため正当な報復は必要なのです。

しかしまさにここでイエスはまことに驚くべきことを言うのです。旧約を引いて正当な報復を認めていたイエスは、こう言うのです。正当な報復は、悪人に手向かわないことにおいてのみ成り立つのだと。簡単にいえば、報復しないことが正当な報復だというのです。イエスに従う人は、そのようにするべきだと。これはいったいどういうことでしょうか。

2　正当な報復は報復しないこと

正当な報復とは、イエスによれば範囲を限定しておこなう報復ではありません。そうではなくて、報復しないこと、仕返しをしないことなのです。それは、報復そのものの否定です。

この、これ以上ない、ある意味で非常識な言葉、逆な言い方をすれば、いわばキリスト教倫理の最高峰ともいうべきイエスの言葉に、人がこれまでにも、さまざまに反応してきたことは、いうまでもありません。さまざまな疑問、批判が投げかけられてきたのです。

いわく悪人に抵抗しないのは、ただたんに臆病だからに過ぎない。弱いからにすぎない。いわく、むしろ悪に人に立ち向かい、それ相当の対応をすることこそが正義というものだ。そうでなければ、悪がこの世を、人間を支配し、人間はその奴隷と化してしまうであろう。いわく、報復し、反抗することこそ自然なことであって、抵抗しないことこそ人間性に反する、等々。

さて、〈報復しない〉とは、いったいどういうことなのでしょうか。イエスが説明のため最初に上げたのは、個人的な関係の例です。

だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい（三九節）。

「だれかがあなたの右の頬を打つ」。なぜこうなったのか理由は分かりません。ともかく相手が殴りかかってきたのです。しばしば言われるように、私の「右の頬」を相手が「打つ」ためには、相手が右利きの場合、その右手の甲で打ってくることになります。侮辱が意図されているのです。

イエスは、反抗せよとも、我慢せよとも言われません。もし人が抵抗するならば、

そしそれが一般に〈正義〉と呼ばれるものでしょうけれど、結局悪は克服されないのです。悪意と報復はつねに相手を上回ろうとします。鉄砲よりは大砲を、大砲よりは、ミサイルを人は持ち出します。際限なくくり返されて、争いは止むことはありません。

これに対してイエスは、「左の頬をも向けなさい」、つまりもう一方の頬を向けなさいと言うのです。まことに驚くべき言葉です。我慢するということではありません。そうではなくて、悪を一部ではなく全部、身に引き受けようとするのです。いわば善による悪への攻撃です。そのようにして悪を行き着くところまで行かせようとするのです。悪は自らの対象を失うことによってしか止むことはないからです。それゆえ彼が、悪を極みまで引き受けたときに、悪意と報復の連鎖は、彼においてはじめて断ち切られます。

二つ目の事例は、裁判です。

あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい（四〇節）。

ある人が、おそらく不当に訴えられたのでしょう。裁判で相手は、下着を取ろうとしています。下着というのは肌着です。これに対して上着は、毛布のように使われていて、たいていの人は一枚しかもっていなかった。旧約の掟によれば、上着を質にとった場合は、夕方までに返さなければならないとあります（出エジプト二二・二六以下）。上着は下着とは比べものにならないほど重要なものだったのです。その「上着を〈も〉取らせなさい」とイエスは言っています。本来権利をもっているものも放棄せよというのです。

3　できれば、せめてあなたがたは

さて三つ目の事例は、政治の世界、経済の世界と絡んでいます、

だれかが一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない（四一～四二節）。

一ミリオン（約一四八〇メートル）というのは一マイルのことです。「強いる」という言葉は、戦争で勝った側が、負けた側の者を強制するという意味です。したがって「だれかが」とはローマ兵を指すと思われます（二七・三二）。ローマ兵の無理な命令にも喜んで従えとは！　聞いていたユダヤの人々にとって、イエスの教えは許しがたいものと聞こえたかも知れません。

しかしイエスは言うのです。たとえそれがローマによる強制であっても、要求には喜んで応じなさいと。心から喜んでしなさい。求める者には与えなさい、あなたから借りようとする者に、背を向けてはならないと。

報復しないということは、ついには、ここにあるように、理不尽な要求でもそれに従えということになります。

ところで、こうしたイエスのもろもろの教えを、もし私どもが、一般の倫理、あるいは道徳箇条として理解するならば、またそれをそのまま人生訓のようなものにするならば、それは、理性を失った、異常な、いわば〈狂信〉以外の何物でもないのではないでしょうか。かえってそれは神によって守られているこの世界が破壊されてしまうことにしかならないのです（ボンヘッファー）。

「悪人に手向かってはならない」とか、「右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」とか、「求める者には与えなさい。・・・借りようとする者に、背を向けてはならない」というよう言葉を聞きながら、私どもみな、福音書が証しするイエス・キリストご自身のことを、思い起こさざるをえなかっただろうと思います。その通り。私ども、十字架につけられたイエスの言葉としてしか、こうした言葉を受けとることはできませんし、そうした言葉が真理だとすれば、それはイエス・キリストにおいてだけなのです。

イエス・キリスト、この方は、みずからを低くして、貧しい人々、悲しむ人々、柔和な人々とともに生きようとした人です。彼らに神の救いを告げ、神の救いをもたらそうとした人です。それゆえ苦しめられ、その苦しみを引き受けて十字架にかけられたのです。その復活は、悪が克服され、悪に対してイエスが勝利したことのしるしにほかなりませんでした。この十字架と復活において悪に対する勝利を見いだす者だけが、それを信じる者だけが、イエスの教えに、イエスの戒めに聞き従い、それに生きることができるのです。

このイエスの教えが初代教会の人々に広く引き継がれたことは、例えば使徒パウロの手紙から明らかです。

> だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善をおこなうように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』〔申命記三二・三五〕と主は言われる」と書いてあります（ローマ一二・一七～一九）。

これらの言葉の背後にイエスの山上の説教があることは明らかです。その上でパウロの語ることは、私どもにとって、慰めです。

何より彼は、悪に悪を返さず、すべての人の前で善をおこなうように「心がけなさい」と言っています。できなくてもいいということではありませんが、心がけることなら、努力することなら私どもにできます。

もう一つ「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい」という言葉が耳に残ります。「すべての人」と平和に暮らすことなど、私どもには不可能かも知れません。でも「できれば」です。それでいいのです。それなら可能なのではないでしょうか。日本のキリスト者は少数です。でも「せめて」あなたがたは、すなわち、イエスをキリストと信じ従う私どもは、イエスの教えに共に従って行きたいのです。

（二二年八月七日　平和聖日）